

九世紀の『ムハンマド伝』

矢 内 義 顕

はじめに

本稿は、イスラーム支配下における 9 世紀のイベリア半島において、キリスト教の側から生み出された、最初期のムハンマド伝を取り上げるものである。最初に、歴史的な背景を概観し、ついで、この伝記を伝えたエウロギウスについてその生涯を述べる。その上で伝記の本文を提示し、その分析を行なうことにする⁽¹⁾。

1. 歴史的な背景

(1) イベリア半島へのイスラームの侵攻

すでにムハンマド（570年頃-632年）の在世中に、イスラーム勢力はアラビア半島を支配下に置きつつあったが、彼の死後もその急速な拡大は留まることを知らず、東方では661年にシリアのダマスカスを首都とする最初の世襲王朝であるウマイヤ朝（-750年）が誕生する。他方、アフリカ方面では、639年にアムル・イブン・アース（663年歿）がエジプトに進出を開始し、709年にはセウタを除く北アフリカがほぼイスラームの支配下に入る。こうして、スペインも 8 世紀初頭からムスリムの支配下におかれる。

その原因として、5 世紀以降、イベリア半島を支配した西ゴート王国（418-

711年)の衰退があった⁽²⁾。この主な理由は、王位継承権をめぐる上流階級の分裂、上流階級の特権に対する国民の社会的な不満とそれに起因する軍隊への信頼度の欠如、ユダヤ人の迫害、以上の三点が挙げられる⁽³⁾。

上流階級 (clases elevadas) とは、西ゴートの特権階級とスペインのローマ貴族さらに国政・行政管理にも重要な役割を演じた聖職者層である。国王は、この上流階級から選出されることになっており、王位継承をめぐって紛争が絶えなかった。不安定な王権は軍事的な弱体化も引き起こす。こうした上流階級に対し、ローマ以来の自由民とローマ植民地の後継者である極貧の農奴、そしてユダヤ人がいた。ユダヤ人は、主として商業活動に従事していたが、693年のトレド教会会議は、キリスト教改宗を拒む者は奴隷とすることを定め、彼らの経済活動を不可能にし、王国の経済を衰退させた⁽⁴⁾。こうした中で、半島を内戦状態に陥れるまでに至る王位継承の紛争が起きた。西ゴート王ビティサは、息子のアキラを後継者としてを望んだが、彼が他界すると (710年)、上流階級の一団がロドリゴを国王に推挙し、両者の間で紛争が生じる。

このさなか、711年4/5月、最初のムスリム軍が南スペインに上陸する。ここに至るまでの経緯は不明だが、北西アフリカのアラビア人太守ムーサー・イブン・ヌサイルは、イベリア半島の政治的な混乱を何らかのルート (北アフリカのユダヤ人) をとおして知っていたと思われる。ロドリゴの抵抗も空しく、西ゴート王国は滅亡し、ムスリム軍は715年までにイベリア半島の北西部を除く地域を支配下におさめる。

ここでいったん目を東に転じることにする。上述のウマイヤ朝は、750年、アッバース家の革命軍によって滅亡する。この時、ウマイヤ朝カリフだったヒシャームの孫アブドゥッラフマーンは、虐殺を逃れて北アフリカに渡り、さらに755年にはイベリア半島に渡り、翌年、コルドバで政権を樹立し、後ウマイヤ朝 (755-1031年) を開く。

(2) 9世紀のコルドバ

ムスリム支配者は、その統治下のキリスト教徒およびユダヤ人と契約（ズインマ）を結ぶことによって、彼らを庇護民（ズインミー）とした。その契約は、生命と財産、宗教活動の自由などの権利を保障する代わりに、人頭税（ジズヤ）の貢納を義務づけるものであった。ムスリム統治下のコルドバにおける保護契約の文書は現存しない。しかし、東方世界と異なり、小数のムスリムに対して多数のキリスト教徒、ユダヤ人という社会構成においては、宗教的な活動に対する制限もかなりゆるやかであったと推定される。ただし、イスラームに対する冒瀆には厳罰が下された⁽⁵⁾。

こうした状況にあって、キリスト教の側はイスラームをどのように見たのだろうか。たとえば、『754年の年代記』などのように、8世紀のキリスト教徒による年代記は、もっぱらイスラームを政治的・軍事的な支配者と見なし、その宗教についてはほとんど関心を示していない⁽⁶⁾。しかし、教会はムスリム支配者と妥協し、またアラビア語を話し、アラブ名を名乗り、ムスリムの慣習や高度な文化を身につける者もあり、イスラームに改宗する者たちも増加していった。9世紀のアルヴァルスは『光輝の書』（Indiculus Luminosus）において、アラビア語とその詩歌に魅了され、ラテン語とキリスト教をないがしろにするコルドバの若いキリスト教徒たちについて、次のように述べている。

「若いキリスト教徒たちは皆、優美な振る舞い、能弁、目立つ衣裳や物腰、異国の学問で名声をはせている。彼らは、アラブの雄弁に心酔し、カルデア人（アラブ人）の書物を、貪るように学び、一心不乱に読み、熱心に論じ合い、大金をはたいて膨大な書物を集め、修辞の限りを尽くして誉めそやす。彼らは、教会の文体の美しさなど一顧だにせず、楽園から注ぐ教会の文体の流れを、まったく取るに足らないものであるかのごとく軽蔑する。悲しいかな。このキリスト教徒たちは自分たちの言葉を忘れ、友人の安否を尋ねるためにラテン語でまともに書簡を書き送ることができる者など、キリスト教徒すべてを集めた

としても、千人に一人でも見出されればよいだろう。これにひきかえ、カルデア人の華美な言葉をさかしらにひけらかす輩は、数限りなく見出されるのである」⁽⁷⁾。

(3) コルドバの殉教者たち

ところが、この9世紀中頃に、異常な事件が生じる。「コルドバの殉教者たち」と呼ばれるこの出来事は、851年の6月3日から860年までに、女性9名を含む50人近くの殉教者たちを生み出した事件である⁽⁸⁾。これは、イサークという名のキリスト教徒の殉教に端を発する。

イサークは、コルドバの高貴な生まれのキリスト教徒で、教養もあり、アラビア語にも堪能であった。彼は、アミール・アブドゥッラフマーン2世（在位822-852年）の治世下で非ムスリムが到達できる最も高い地位、国家書記官（*exceptor reipublicae*）を務めたが、この職を辞し、町の北にあるタバノス修道院に入った。この修道院には、彼の従兄弟ヒエレミアスとその妻イサベルがいた。彼らは財産家だったが、すでにこの修道院に入る前に世俗で禁欲的な生活を送った後、その財産でこの修道院を創設し、修道院長はイサベルの兄弟であった。イサークは、三年間の修道生活を送った後、そこを去ってコルドバの町に戻る。そしてカーディ（裁判官）の前で大声を上げてイスラームを冒瀆した。カーディは驚愕する。こうして彼は逮捕され、瀆聖の罪によって、851年6月3日に処刑される⁽⁹⁾。このイサークの処刑に刺激され、その後の二日間で6人のキリスト教徒が殉教し、翌月には3人が殉教する。さらに三ヵ月後、フローラとマリアという2人の女性が殉教する⁽¹⁰⁾。フローラはムスリムの父とキリスト教徒の母との間に生まれ、本来ならば、ムスリムとして育てられるはずであった。しかし、父が早くに死んだため、キリスト教徒として育ったのである。こうして、次々と自発的な殉教者が登場する。

むろん、アブドゥッラフマーン2世もこうした殉教志願者を断罪する処置を

とるだけではなかった。彼は、教会指導者たちに命じ、こうした殉教者が出ないように、教会内部で対策を立てさせた。それも十分な効を奏さないまま、852年9月22日、アブドゥッラフマーン2世は没する。次のアミールとなったムハンマド1世（在位852-886年）は、キリスト教徒の公職追放などの様々な手段を講じるが、それらは必ずしも厳格に実施されたわけではなかった。こうして、860年までに50名近くの殉教者を生むことになった。

このような自発的殉教者がなぜ突然に生じたのかという政治的、社会的な要因、殉教者自身の動機についてはさまざま分析があり、ここではそれについて触れる余裕はない⁽¹¹⁾。しかし、この一連の事件は、コルドバの教会指導者たちにとっても、またムスリムたちと共存する多くのキリスト教徒にとっても、支持できることではなかった。彼らは、過激な行動が支配者の怒りをかい、教会全体が弾圧を受けることを恐れたに違いない。それゆえ、彼らは支配者の意向に沿って、この自発的殉教を抑えようとする。支配者と妥協し、殉教者を非難する教会の姿勢に対して不満を覚えたのが、エウロギウス（859年歿）と彼の友人である上述のアルヴァルス（800-860年頃）だった。これらの殉教者の大部分については、彼らの一連の著作によって知ることができる。

(4) エウロギウスの生涯

エウロギウスについては、アルヴァルスが伝記を残しているために、ある程度の生涯を描くことができる⁽¹²⁾。

彼は、コルドバのセナートルの家柄に生まれ、幼くして聖ソイロ教会に預けられ、修道院長スペラインデオ（Speraindeo）の教育を受ける⁽¹³⁾。ここで彼はアルヴァルスとも知り合いになる。この修道院長について詳しいことは分らないが⁽¹⁴⁾、彼がイスラームの天国に関する論駁を著したことは、そのほんの一部がエウロギウスの著作に引用されていることから知られる⁽¹⁵⁾。このことから、彼がエウロギウスの後の活動にかなりの影響を与えたことは推察される。

やがて、エウロギウスは、助祭、ついで司祭となり、さらには教師 (Magister) として若い聖職者の教育にも従事する。おそらく848-49年と思われるが、彼は、スペイン北部のナヴァーラを旅行する。そしてこの地の修道院で、彼はウェルギリウス、ホラティウス、ユウエナリス、そしてアウグスティヌスの『神の国』などを見つけ、さらに、これから述べる『ムハンマド小伝』の写本を発見する⁽¹⁶⁾。

コルドバに帰った彼を待ち受けていたのが、上述の殉教事件である。この最初の殉教事件の直後、彼は他の聖職者とともにイスラーム当局により逮捕され、その年の11月29日まで拘留される。これは、彼が殉教を扇動したというのではなく、当局が殉教を阻止するために、教会に何らかの圧力を加えたためである。この後、彼は、教会がとったイスラーム側への妥協策に反発する。こうした中で彼は、殉教した者たちを擁護するために『聖人伝』(Memoriale sanctorum) を書き続け、さらには857年頃に『殉教者擁護の書』(Liber apologeticus martyrum) を執筆する。859年、イスラーム当局は、イスラームの背教者レオクリティアをかくまった罪でエウロギウスを逮捕する。そして彼自身、アミールの宮殿でイスラームを公然と非難し、859年3月11日に斬首される⁽¹⁷⁾。

2. 『ムハンマド小伝』

上述のように、エウロギウスは、殉教者たちを擁護するために『殉教者擁護の書』を執筆する⁽¹⁸⁾。そしてその中で、彼は、支配者の宗教を批判するために、旅行先で発見した『ムハンマド小伝』を引用するが、彼はこの発見の次第を次のように述べる。「かつて、私がパンプロナの町にいたとき、レイレ修道院にしばらく滞在し、そこにあったすべての書物で、私の知らないものがないかどうかを探し、思いがけず、ある小さな書物の一部分に、著者の名前はなかったが、忌まわしい預言者に関する記述を発見した。」⁽¹⁹⁾

この「忌まわしい預言者に関する記述」(『ムハンマド小伝』)は以下のとお

りである。

「さて、異端者ムハンマドは、皇帝ヘラクレイオスの時代、彼の治世の七年目、イスパニア暦の656年に登場した。この時代は、イスパニアの司教イシドルスが、公同教会の教えにおいて光彩を放っており、またトレドのシセプトが王位の絶頂にあった。イリトゥルギの町に聖エウフラシウス教会が、その墓の上に建てられた。トレドにも、前述の若い王の命令によって、聖女レオカディアの教会堂の巨大な建物が、驚くべき業によって、建てられた。上述の忌まわしい預言者ムハンマドは、十年間権勢を誇り、その挙句に死に、地獄に下った。

彼の出自は以下の通りである。彼は未成年の頃、ある寡婦に頼って生活をしていて。そして貪欲な高利貸しとして、商売に乗り出したとき、キリスト教徒の小さな集まりに足繁く通うようになったが、ずる賢い闇の子であったために、キリスト教徒の数多くの談話を記憶し、同胞の野蛮なアラブ人たちの中では誰よりも賢い者になった。しかも、情欲の炎に燃え上がり、野蛮人の習慣に従って、彼の保護者だった女性と肉体関係を結ぶことも躊躇しなかった。ただちに、誤謬の霊が、黄金の口ばしをもったハゲタカの姿で現れ、自分は天使ガブリエルだと告げ、彼に預言者になりすますようにと命じた。傲慢に膨れ上がった彼は、野獣のような者たちがこれまで聞いたことのないようなことを説き始め、もっともらしく、偶像崇拜から離れ、天にいる身体を持たない神を崇拜するようにと説得した。彼の信奉者たちには武装するように命じ、また、改宗者の熱狂に突き動かされたかのごとくに、敵対者たちを剣で殺戮するように教化した。神は、隠された判断によって、この者たちによる殺害をお許しになった。このことを神は、すでに、預言者を通して語っておられた。すなわち、『見よ、わたしはカルデア人を起こす。冷酷で剽悍な国民。地上の広い領域に軍を進め、自分のものでない領域に軍を進める。彼らの馬は夕暮れの狼よりも素早く、彼らの顔は熱風のように、信心深い者たちに襲いかかり、地は無人に帰す

る。』と述べられているとおりである。というのも、彼らは、彼らの土地の支配権をもっていた、皇帝の第一の兄弟を殺し、勝利の栄光に歓喜して、シリアのダマスカスに王国の首都を据えたのである。

ついで、この偽預言者は、理性を欠いた動物たち、つまり、赤い雌牛をほめたたえる詩を作った。彼はまた、ハエを捕らえるためのハエ取りのクモの巣の物語を作った。さらにヤツガシラとカエルの歌を作り、一方の悪臭がその口から吐き出され、他方のおしゃべりがその舌から途切れることはない、とうたった。また、彼の誤謬に香味を添えるために、ヨセフ、ザカリア、さらには主の母親マリアまでもほめたたえる歌を、彼の筆によって創作した。

かくも誤った預言を続けながら、彼はザイドという名の隣人の妻に情欲を抱き、彼の欲望の餌食にした。自分の結婚が冒瀆されたことを知ったとき、ザイドは恐れたが、彼の預言者に逆らうことができなかったのも、彼女を許したのである。それどころか、かの者は、あたかも主の声であるかのように、彼の法において次のように述べた。すなわち、『かの女はザイドの目に気に入らず、彼は彼女を離縁したので、われわれ（アッラー）は彼女をわれわれの預言者と結婚によって結びつけた。これを他の者たちのための先例とし、以後これと同じことを望む者は、罪を犯すことにはならない』と言った。

これほどの冒瀆を行なった後に、彼の魂と肉体の死が同時に迫ってきた。彼も自分が間もなく死ぬことに気づいたが、自分の功德ではいかにしても復活しないだろうことを知っていたので、日頃から彼が言っていた、いつもハゲタカの姿で現れる天使ガブリエルによって彼が三日目に復活させられるだろう、と予言した。彼の魂が地獄に引き渡されたとき、この奇跡を告げられ、好奇心に駆られた者たちは、彼の死体を見張るよう厳格な番人たちに命じた。番兵たちは、三日たって遺体が腐乱してきたのを見、いっこうに復活しないことを認めたとき、天使たちは彼らが居ることに驚いてやって来なかったのだと言った。そこで（彼らなりに考えた末に）浮かんだ名案は、番人をはずして、その遺体

を放置しておくことだった。するとただちに、天使の代わりに、犬たちが来て、遺体のわき腹に食らいついた。それを見た者たちは、彼の遺体の残りを埋葬した。彼らは、この侮辱に報復するために、毎年犬たちを殺すことに決めた。こうして、彼のために殉教に服するという功績を得た者たちは、かの世において彼の功績に与ることになった。自分の魂だけでなく多くの人々の魂も地獄に送った、この種の預言者が犬の胃袋を満たすのは当然だった。」

3. 『ムハンマド小伝』の分析

『ムハンマド小伝』（以下『小伝』）は、ムハンマドが世界史の舞台に登場した年代、ムハンマドの半生、悪魔に唆されて預言者を詐称したこと、コーラン、ムハンマドの放埒な女性関係、汚辱にまみれた死などを簡潔に記す。以下にこの内容を分析する。

(1) ムハンマドの登場した年代

「さて、異端者ムハンマドは、皇帝ヘラクレイオスの時代、彼の治世の七年目、イスパニア暦の656年に登場した。この時代は、イスパニアの司教イシドルスが、公同教会の教えにおいて光彩を放っており、またトレドのシセプトが王位の絶頂にあった。イリトゥルギの町に聖エウフラシウス教会が、その墓の上に建てられた。トレドにも、前述の若い王の命令によって、聖女レオカディアの教会堂の巨大な建物が、驚くべき業によって、建てられた。上述の忌まわしい預言者ムハンマドは、十年間権勢を誇り、その挙句に死に、地獄に下った」⁽²⁰⁾。

『小伝』は、ムハンマドの登場を世界史およびスペイン史の中に位置づける。それによると、ムハンマドが登場したのは、ビザンツ皇帝ヘラクレイオス（在位610-41年）の「治世の七年目」、「イスパニア暦の656（西暦618）年」である。さらに、『小伝』は、イスパニアの司教イシドルス（560-636年）、トレドの王シセプト（在位612-21年）⁽²¹⁾およびコルドバ近くのイリトゥルギ（アンデュハ

ル)の町の聖エウフラシウス教会、トレドの守護聖女レオカディア(304頃殉教)の教会に言及する。このことは、本文書の成立場所に関する情報を提供する。すなわち、エウロギウスがこの文書を発見したのは北部の修道院だったが、文書自体は、トレドを中心としたより南の地域で書かれ、北部に流布したことを推定させる⁽²²⁾。

次に、「イスパニア暦の656(西暦618)年」という年代設定だが、この手がかりとなる一節が、ビザンツの資料に依拠したと思われる、上述の『754年の年代記』に見出される⁽²³⁾。そこには、「皇帝ヘラクレイオスの治世、(イスパニア暦)656(西暦618)年に、サラセン人たちが反乱を起こし、シリア、アラビアそしてメソポタミアを占領した。それは、彼らの指導者ムハンマドの武力によるものではなく、悪巧みによるものだった。さらに、彼らは、近隣の属州も蹂躪したが、あからさまに攻撃を仕掛けるのではなく、密かに侵入するという手口を用いたのである」とあり、さらに、皇帝ヘラクレイオスの弟テオドロスがサラセン人との戦いで殺害されたこと、サラセン人によるダマスカスの占領が述べられ、「ムハンマドの治世がその十年目で終わったとき、彼の部族出身のアブー・バクルがその王座を継いだ」⁽²⁴⁾と記されている。

ムハンマドが、メッカからメディナ(ヤスリブ)に移住したのは622年(ヒジュラ)、さらに様々な抗争を経て、最終的にメッカを征服し、無血入城したのが630年であるから、ここで記されていることは、歴史的な事実とは一致しない。むしろ、この『年代記』が記す出来事は、彼の死後、カリフ・アブー・バクル(在位632-34年)およびウマル(在位634-44年)などの時代に属することであり、さらに、ダマスカスを都とするウマイヤ朝が成立するのは661年のことである。

『小伝』の著者がこの『754年の年代記』を参照したのか、あるいは『小伝』も『年代記』も共通のビザンツの資料を参照したのかは不明だが、『小伝』の記述が『年代記』とほぼ一致することは確かである。これらの資料が伝えてい

ることは、ムハンマドが「イスパニア暦の656（西暦618）年」に世界史の舞台に登場し、その十年後、すなわち、イスパニア暦666年（西暦628）年に死んだということである。むろん、彼が実際に死んだ年である632年と多少のずれがあるが、ここで重要なことは、R. W. サザーンの指摘するように、「666」という数字である。それは、新約聖書の「ヨハネ黙示録」13章18節が「賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六」と記すとおり、「獣」すなわち「偽預言者」（黙19：20）「アンチ・キリスト」（1ヨハネ2：18；4：3；黙13：1-10）を象徴しているからである⁽²⁵⁾。もちろん、このことは、イスパニア暦で考えた場合にのみ当てはまるのだが、ムハンマドを「アンチ・キリスト」と結びつける意図は明らかであろう。

(2) ムハンマドの半生

上述のとおり、『小伝』はムハンマドが世界史の舞台に登場した年代と彼の没年については記しているが、彼の生年、生地については何も述べていない。しかし、「偽預言者」として登場する以前の彼について、次のように記している。

「彼の出自は以下の通りである。彼は未成年の頃、ある寡婦に頼って生活をしていた。そして貪欲な高利貸しとして、商売に乗り出したとき、キリスト教徒の小さな集まりに足繁く通うようになったが、ずる賢い闇の子であったために、キリスト教徒の数多くの談話を記憶し、同胞の野蛮なアラブ人たちの中では誰よりも賢い者になった。しかも、情欲の炎に燃え上がり、野蛮人の習慣に従って、彼の保護者だった女性と肉体関係を結ぶことも躊躇しなかった」⁽²⁶⁾。

ムハンマドは、570年頃メッカのクライッシュ族の一員として生まれるが、両親は早く死に、孤児として祖父のアブドゥルムッタリブ、さらに祖父の死後は伯父のアブー・ターリブの保護を受けて育った。「かれ（アッラー）は孤児

のあなた（ムハンマド）を見付けられ、庇護なされたではないか」というコーランの一節（93：6）はこのことを述べている⁽²⁷⁾。やがて、彼は、未亡人であった富裕な商人ハディージャに雇われ、シリアへの隊商貿易に従事し、その商オを見込まれて、25歳頃に15歳年上のハディージャと結婚する。

『小伝』では、ムハンマドが孤児であったことは述べられていないが、「未成年の頃、ある寡婦に頼って生活をしていた」と述べ、さらに「情欲の炎に燃え上がり、野蛮人の習慣に従って、彼の保護者だった女性と肉体関係を結ぶことも躊躇しなかった」として、ムハンマドの性的な放埒さを強調し、また彼の職業を商人とせず、キリスト教世界においては罪とされた「高利貸し」とすることで、彼の金銭的な貪欲を強調する。さらに『小伝』は、ムハンマドが、キリスト教徒の集まりに足繁く通い、そこで知恵を習得し、アラビア人たちの間で賢者となったと述べる。

ムハンマドがキリスト教徒と接触したことは、イスラームの伝承の中にもあることは事実である。9世紀のイブン・イツハーク（704年頃-767年頃）による『ムハンマド伝』⁽²⁸⁾の中には、伯父のアブー・ターリブが幼いムハンマドを連れてシリアに商売に行った際、バヒーラーという修道士がこの少年に預言者のしるしを認めたこと、またハディージャとの結婚前に、彼女の指示に従い彼がシリアに行った際、伝承ではナストゥール（ネストリウス）という名の一人の修道士が彼を預言者と見なしたこと、さらに結婚後には、彼女のいとこで、キリスト教徒ワラカが彼を預言者と認めたことが記されている⁽²⁹⁾。キリスト教の側から書かれたムハンマド伝では、しばしば、ムハンマドに異端的なキリスト教を教えた修道士、あるいはユダヤ人、そして悪魔が登場するが⁽³⁰⁾、それらはこうした伝承を歪曲したと考えられる。しかし、この『小伝』ではそうした人物のことは触れられず、次に引用するように、もっぱら悪魔の仕業のみが記されている。

(3) 悪魔の教唆

『小伝』は次のように述べる。「ただちに、誤謬の霊が、黄金の口ばしをもったハゲタカの姿で（ムハンマドに）現れ、自分は天使ガブリエルだと告げ、彼に預言者になりすますようにと命じた」⁽³¹⁾。

ハディージャと結婚し、商人としても順調に活躍したムハンマドは、40歳前後から、時おりメッカ近郊のヒラー山の洞窟で瞑想に耽るようになり、そこで大天使ジブリエル（ガブリエル）からアッラーの啓示を受けたと言われる。コーランは、必ずしもこの出来事を述べているわけではないが、ジブリエルが神の啓示を伝えるものであることは述べられており（2：97-98）、また「本当にこの（コーラン）は、万有の主からの啓示である。誠実な聖霊がそれをたずさえ、あなた（ムハンマド）の心に（下した）」（26：192-194）の「誠実な聖霊」とは伝統的にジブリエルを指すと解釈されている。

しかし『小伝』は、ハトの姿をとる聖霊ではなく（マルコ1：10および平行記事）、「黄金の口ばしをもったハゲタカの姿をした」「誤謬の霊」すなわち悪魔が、ムハンマドに「預言者となりすますように」唆したと述べて、次のように続ける。

「傲慢に膨れ上がった彼は、野獣のような者たちがこれまで聞いたことのないようなことを説き始め、もっともらしく、偶像崇拝から離れ、天にいる身体を持たない神を崇拝するようにと説得した。彼の信奉者たちには武装するように命じ、また、改宗者の熱狂に突き動かされたかのごとくに、敵対者たちを剣で殺戮するように教化した」⁽³²⁾。『小伝』の著者は、ムハンマドが偶像崇拝を行っていたアラブ人たちに一神を崇拝することを教えたことを認めるが、同時に、ムハンマドを認めない者たちに対して武力攻撃を命じたと述べている。この一節はコーランの「あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え」（2：190）を暗示していると言えるだろう。

ここで『小伝』は、イスラームの軍事的侵攻を、旧約聖書の「ハバクク書」

(1 : 6, 8) の預言の成就として解釈する。「神は、隠された判断によって、この者たちの殺害をお許しになった。このことを神は、すでに、預言者を通して語っておられた。すなわち、『見よ、わたしはカルデア人を起こす。冷酷で剽悍な国民。地上の広い領域に軍を進め、自分のものでない領域に軍を進める。彼らの馬は夕暮れの狼よりも素早く、彼らの顔は熱風のように、信心深い者たちに襲いかかり、地は無人に帰する。』と述べられているとおりである。というのも、彼らは、彼らの土地への支配権をもっていた、皇帝の第一の兄弟を殺し、勝利の栄光に歓喜して、シリアのダマスカスに王国の首都を据えたのからである」⁽³³⁾。アラブ人がカルデア人と呼ばれていたことは、すでに引用したアルヴァルスの言葉からも明らかであり、また、この最後の一節に出てくる皇帝の兄弟とは、上述のようにテオドロスのことである⁽³⁴⁾。

この悪魔の登場の後、『小伝』はコーランについて述べる。

(4) コーランについて

「ついで、この偽預言者は、理性を欠いた動物たち、つまり、赤い雌牛をほめたたえる詩を作った。彼はまた、ハエを捕らえるためのハエ取りのクモの巣の物語を作った。さらにヤツガシラとカエルの歌を作り、一方の悪臭がその口から吐き出され、他方のおしゃべりがその舌から途切れることはない、とうたった。また、彼の誤謬に香味を添えるために、ヨセフ、ザカリヤ、さらには主の母親マリアまでもほめたたえる歌を、彼の筆によって創作した」⁽³⁵⁾。

『小伝』がコーランを「詩」「歌」と呼んでいることは、確かに、コーランがサジウと呼ばれる押韻散文の形式で書かれている事実とも一致するが、上述のアルヴァルスの引用にあるように、アラブ人たちが詩歌を好んだということに基づいているとも考えられる。さらに、述べられている内容についても、ある程度コーランとの対応関係を指摘することができる⁽³⁶⁾。「理性を欠いた動物たち、つまり、赤い雌牛をほめたたえる詩」はコーランの表題「6家畜章」およ

び「2雌牛章」を、「クモの巣の物語」は「29蜘蛛章」を暗示する。カエルについては該当する表題も章句もコーランにはない。

しかし、ヤツガシラについては「27蟻章」16-44節に、次のような物語がある。スライマーン（ソロモン）王は鳥の言葉を解する能力を授かっており、彼の軍隊はジンと人間と鳥からなっていた。あるとき彼が自分の鳥たちを検閲すると、ヤツガシラがいないことに気づいた。王が怒ると、鳥は姿を現わし、サバア（シェバ）の女王がアッラーを差し置いて太陽を拝んでいると報告する。王は事の真相を確かめるために、ヤツガシラに命じ、女王に手紙を送る。間もなく女王は王のもとを訪問し、アッラーに帰依する。言うまでもなく、旧約聖書の「列王記上」8章1-13節に記されるシェバの女王のソロモン訪問の物語のコーラン版であるが、聖書にはヤツガシラは登場しない。また、ヤツガシラと悪臭を結びつける章句はコーランにはない。

ヨセフについては、「12ユーフス章」があり、これは旧約聖書の「創世記」37-50章のヨセフ物語のコーラン版である。マリアについては、「19マルヤム章」があり、洗礼者ヨハネの父ザカリアはこの章にも登場するが、「3イムラーン家章」37節以下でもマリアの養父として登場する。

「理性を欠いた動物たちを…ほめたたえる詩」あるいは悪臭を放つヤツガシラ、おしゃべりなカエルというように、『小伝』の著者がコーランを嘲笑する意図は明白であるが、以上の対応関係から、彼がコーランを読んでいたという確証はないとしても、多少は知識をもっていたことが分かる。このことは、ムハンマドの性的な放埒を非難する次の文章からも明らかである。そこには、コーランの引用がなされているからである。

(5) ムハンマドの性的な放埒

「かくも誤った預言を続けながら、彼はザイドという名の隣人の妻に情欲を抱き、彼の欲望の餌食にした。自分の結婚が冒瀆されたことを知ったとき、ザ

イドは恐れたが、彼の預言者に逆らうことはできなかったので、彼女を許したのである。それどころか、かの者は、あたかも主の声であるかのように、彼の法（コーラン）において次のように述べた。すなわち、『かの女はザイドの目に気に入らず、彼は彼女を離縁したので、われわれ（アッラー）は彼女をわれわれの預言者と結婚によって結びつけた。これを他の者たちのための先例とし、以後これと同じことを望む者は、罪を犯すことにはならない』と言った³⁷⁾。

ムハンマドは、ハディージャの死後、9人の妻を娶ったと言われる。このこと自体、西欧のキリスト教的な倫理観からすると、十分に非難的となることではあるが、この『小伝』が伝えるザイドの物語は、とりわけ、槍玉に挙げられるものである。これについて、W. M. ワットは次のようにイスラームの伝承を紹介する。

「ムハンマドの全ての結婚の中で、最も論議的となる結婚は、627年3月末頃のことであった。これは、ザイナブ・ Bint・ ジャフシュとの結婚であった。それは同時代の非難を受け、また西欧の学者による毒を含んだ攻撃的となってきた。…ザイナブはムハンマドの従姉妹、彼の父の姉妹の一人の娘であった。ヒジュラの時、彼女はおそらく寡婦であり、彼女同様イスラーム教徒であったと思われる兄弟たちとともにメディナに移住した。そこで彼女はムハンマドに強いられ、意に沿わぬまま、彼の養子であるザイド・イブン・ハーリサと結婚した。626年のとある日、ムハンマドはザイドと談論する為に彼の家を訪れた。ザイドは外出中であったが、彼はほとんど何も身にまわっていないザイナブを見、彼女への恋のとりこになったと考えられる。彼は『神に讃えあれ、恋愛の司に讃えあれ』と独言しながら去って言った。ザイナブはザイドに、ムハンマドが訪れ、家に入ることを断り、謎のような言葉を残したことを告げた。ザイドは直ちにムハンマドの下に赴き、ザイナブの離婚を申し出たが、ムハンマドは彼に彼女を離婚しないよう告げた。しかしながら、この後、ザイドにとってザイナブとの生活は耐え難くなり、彼は彼女を離婚した。彼女の『待婚期間』

(イッダ)が完了した時、ムハンマドとの縁談がまとめられた」³⁸⁾。

そしてこの事件に関連するコーランの章句は以下の通りである。

「アッラーの恩恵を授かり、またあなたが親切を尽くした者に、こう言った時を思え。『妻をあなたの許に留め、アッラーを畏れなさい。』だがあなたは、アッラーが暴露しようとした、自分の胸に隠していたこと（養子の妻との結婚が人の口の端に上がることを）を恐れていた。寧ろあなたは、アッラーを恐れるのが本当であった。それでザイドが、かの女について必要な事を済ませ（離別し）たので、われはあなたをかの女と結婚させた。（これからは）信者が、必要な離婚手続きを完了した時は、自分の養子の妻でも、（結婚にも）差し支えないことにした」（33：37）。

ワットは、この伝承は「割引して受け取られねばならない」とし、またこの出来事の背後にある政治的な問題を推測する。さらに、同時代の人々がこの結婚を非難した点は、他人の妻に心を惹かれ、彼女と結婚したということではなく、たとえ養子とはいえ、自分の息子と結婚したことのある女性（自分の娘）と結婚したということ、つまり、「近親相姦的な性格」にあったことを指摘する³⁹⁾。現在のイスラームの理解もこれと同様である⁴⁰⁾。

むろん『小伝』はこうした事情を知らなかっただろう。『小伝』は、ザイドを「養子」とはせず「隣人」として、ムハンマドが『十戒』の「あなたは隣人の妻を欲してはならない」（申命記5：21）という規定に反する冒瀆的な行為を行ない、さらに、それを神の命令であるとして正当化し、他の人々にもそうした行為を許したと非難しているのである。しかし、ここで『小伝』の行なう引用がコーランとほぼ一致し、またアッラーが自らを「われわれ」と呼ぶ点（威嚴の複数形）もそのまま保持されている点は興味深い。当然、このことは、イスラームが複数の神々を認めているという批判につながるのだが、それについては言及されない。

いずれにせよ、このザイド、ザイナブの物語は、ワットも指摘するように、

キリスト教世界でたびたび「毒を含んだ攻撃的となった」ことになる⁽⁴¹⁾。

(6) ムハンマドの死

「これほどの冒瀆を行なった後に、彼の魂と肉体の死が同時に迫ってきた。彼も自分が間もなく死ぬことに気づいたが、自分の功德ではいかにしても復活しないだろうことを知っていたので、日頃から彼が言っていた、いつもハゲタカの姿で現れる天使ガブリエルによって彼が三日目に復活させられるだろう、と予言した。彼の魂が地獄に引き渡されたとき、この奇跡を告げられ、好奇心に駆られた者たちは、彼の死体を見張るよう厳格な番人たちに命じた。番兵たちは、三日たって遺体が腐乱してきたのを見、いっこうに復活しないことを認めたとき、天使たちは彼らが居ることに驚いてやって来なかったのだと言った。そこで（彼らなりに考えた末に）浮かんだ名案は、番人をはずして、その遺体を放置しておくことだった。するとただちに、天使の代わりに、犬たちが来て、遺体のわき腹に食らいついた。それを見た者たちは、彼の遺体の残りを埋葬した。彼らは、この侮辱に報復するために、毎年犬たちを殺すことに決めた。こうして、彼のために殉教に服するという功績を得た者たちは、かの世において彼の功績に与ることになった。自分の魂だけでなく多くの人々の魂も地獄に送った、この種の預言者が犬の胃袋を満たすのは当然だった」⁽⁴²⁾。

言うまでもなく、ここでは、三日目に復活することを予告し、復活したイエス・キリストとそれに失敗し、遺体を犬に食われるという偽預言者ムハンマドの死が対比されている。遺体が犬に食われるという記述は、旧約聖書の「列王記下」9章で語られるイスラエルの王アハブの後イゼベルの物語を想起させる。彼女は、イエフの謀反により殺害され、遺体を犬に食われ「人々が（彼女を）葬ろうとして行くと、頭蓋骨と両足、両手首しかなかった」（35節）と言われる。さらに、「詩編」22編17節「犬どもがわたしを取り囲み、さいなむ者が群がってわたしを囲み、獅子のようにわたしの手足を砕く」という言葉も想

起させる。この「詩編」の2節「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか…」は、イエスが十字架上で叫んだ言葉であり（マルコ15：34および平行記事）、また、19節「わたしの着物をわけ、衣をとろうとしてくじを引く」は、十字架にかかったイエスの衣をローマの兵士たちが分け合う場面で引用される（マルコ15：24および平行記事）。『小伝』の著者は、これらの箇所を念頭に置いていると思われる。

むしろ、この物語の元となるような伝承はイスラームにはない。また、「彼らは、この侮辱に報復するために、毎年犬たちを殺すことに決めた」という点に関しても、コーランおよびイスラームの伝承に該当するものがない。これに続くように、「彼のために殉教に服するという功績を得た者たちは、かの世において彼の功績に与ることになった」という一文は、前文とのつながりからすると意味が通らない。あるいは、「…アッラーの道のために財産と生命を捧げて奮闘努力した者は、アッラーの御許においては最高の地位にあり、至上の幸福を成就する」（9：20）というコーランの言葉と関連づけることができるかもしれない。以上のような、悲惨な死を遂げた偽預言者という記述も、西欧世界における典型的なムハンマド像となる⁽⁴³⁾。

(7) 『アラブの王ムハンマドに関する注記』

最後に、この『小伝』との関係で『アラブの王ムハンマドに関する注記』（Adnotatio Mammetis Arabum principis）についても触れておこう。これは、セビーリャ司教ヨハネスがアルヴァルスに宛てた神学的な問題を扱う書簡の末尾に、前後の文脈とは無関係に挿入されており、その全文は以下のとおりである。

「アラブの王ムハンマドに関する注記。異端者、アラブの偽預言者たちの封緘、アンチ・キリストの先駆けであるムハンマド（マメット）は、皇帝ヘラクレイオスの治世の七年目、イスパニア暦の656年に登場した。この時代は、イ

スペインのイシドルスがわれわれの教えにおいて光彩を放っており、またトレドのセセプトが王位の絶頂にあった。上述の忌まわしい預言者は、数多くの奇跡によって、彼の追従者たちを震え上がらせたと言われているが、情欲の炎に燃え上がり、他人の妻を奪い、結婚の絆に結びつけることまでした。また、いかなる預言者に関しても、われわれはそのようなことは読んだことがないが、彼は自分と同じ知性をもつラクダの背に乗っていたという。死が近づくと、彼は自分が三日目に復活するだろうと約束したが、見張りの者たちの怠慢から、犬がその遺体を見つけ、貪り食ってしまった。彼は、十年間王位にあり、その終わりに地獄に下った。1217年のことである。(ムーア人がイスパニアに到来したのは、ロドリゴ王の時代、アラブ暦の91年、われわれの暦では1113年、アラブ暦では468年のことである)』⁽⁴⁴⁾

『注記』の記述は、『小伝』よりもさらに簡潔ではあるが、ムハンマドの登場した年代の設定、ザイドの妻ザイナブとの結婚—ここでは「他人の妻」となっている—、復活の予言の破綻、遺体を犬に食われたことなど内容的にはほぼ一致している。相違点は、ムハンマドを「アンチ・キリストの先駆け」と呼ぶ点、ラクダの物語⁽⁴⁵⁾、ムーア人の侵入に関する付加がなされていることである。この侵入は「アラブ暦91年」つまり、ヒジュラ暦91年とされ、西暦では711年となり、西ゴート王国滅亡の年と正確に一致する。このことは、この付加を記した著者がイスラーム側の年代記に通じていたことを示唆する。しかし、他の年代の表記については不明である⁽⁴⁶⁾。

上述のように、エウロギウスは『小伝』の写本を北部のパンプロナで発見したと述べていたが、この『注記』がセビーリャの司教から送られてきたことは、『小伝』ないしこの異本が南部、つまり、イスラームが支配する地域でも流布していたことを証左する。

結 語

エウロギウスは、『ムハンマド小伝』を引用した後、「彼（ムハンマド）は、他の多くの冒瀆的な行為を働いたが、本書には記されていない。ここに書かれていることだけで、読者は、この男がいかにひどい人物であったかを知るだろう。」⁽⁴⁷⁾と述べる。彼が、ムハンマドに関して、この『小伝』以外の様々な情報をもっていたことは明らかであり、またそうした情報が流布していたことは、『アラブの王ムハンマドに関する注記』に記されたラクダの物語からも示すとおりである。それらが、口頭で伝承されていたのか、それとも文書化されていたのかは不明である。

この『小伝』が、北部のみならずアル・アンダルスにおいても流布していたことは上述のとおりであるし、また、今日の写本研究はこの文書が北部においてよく知られていたことを明らかにする⁽⁴⁸⁾。しかし、この文書がピレネー山脈を越えて西欧世界に伝えられた形跡はない。さらに、この『小伝』を記載した『殉教者擁護の書』を含むエウロギウスの著作の手稿写本は、彼の死後、その遺体とともにオビエドに運ばれ、以後、16世紀に至るまで忘却される⁽⁴⁹⁾。したがって、イスラーム支配下のスペインが生み出した、最初期のイスラーム・ムハンマド論駁文書は、西欧世界に知られることはなかった。しかし、ここで述べられている事柄は、いずれも、この後、中世の西欧世界が生み出すムハンマド批判において様々な形で取り上げられることになるだろう⁽⁵⁰⁾。

最後に、本稿では、エウロギウスとアルヴァルスのイスラーム批判についてはほとんど触れることができなかった。これについては、別途論じることにはしたい。

注(1) エウロギウスとアルヴァルスの校訂テキストは、いずれも、*Corpus scriptorum muzarabicorum*, Madrid, 1947に収録されているが、参照することができなかった。本稿では、PL 121, 115に収録されているテキストを使用した。

- (2) 西ゴート王国史については、cf. 鈴木康久『西ゴート王国の遺産』中央公論社、1996年。
- (3) W. M. ワット『イスラーム・スペイン史』黒田壽朗・柏木英彦訳、岩波書店、1976年、pp. 14-15。
- (4) 693年のトレド宗教会議を含む一連の宗教会議については、cf. 鈴木康久, *op. cit.*, pp. 85-114.
- (5) 詳しくは、cf. K. B. ウルフ『コルドバの殉教者たち—イスラーム・スペインのキリスト教徒—』林邦夫訳、刀水書房、1998年、pp. 17-31.
- (6) 詳しくは、cf. K. B. Wolf, 'Christian Views of Islam in Early Medieval Spain' in *Medieval Christian Perceptions of Islam*, ed., J. V. Tolan, Routledge, 1996, pp. 85-108. また、*Conquerors and Chroniclers of Early Medieval Spain*, Translated with notes and introduction by K. B. Wolf, Liverpool Uni. Press, 1999には、この時代の文書の英訳が収録されている。
- (7) "Nonne omnes juvenes Christiani vultu decori, linguae deserti, habitu gestuque conspicui, gentilitia eruditione praeclari, Arabico eloquio sublimati, volumina Chaldaeorum avidissime tractant, intentissime legunt, ardentissime disserunt, et ingenti studio congregantes, lauta constrictaque lingua laudando divulgant, ecclesiasticam pulchritudinem ignorantes, et Ecclesiae flumina de paradiso manantia, quasi vilissima contemnentes. Heu proh dolor! linguam suam nesciunt Christiani, et ligum propriam non advertunt Latini, ita ut omni Christi collegio vix invenitur unus in milleno hominum numero, qui salutatorias fratri possit rationabiliter dirigere litteras. Et reperitur absque numero multiplex turba, qui erudite Chaldaicas verborum explicet pompas." *PL* 121, cols. 555A-556A.
- (8) 詳しくは、K. B. ウルフ, *op. cit.*; N. Daniel, *The Arabs and Mediaeval Europe*, Longman, 1975, pp. 23-48; J. V. Tolan, *Saracens: Islam in the Medieval European Imagination*, Columbia University Press, 2002, pp. 71-104; A. Christys, *Christians in Al-Andalus 711-1000*, Curzon, 2002, pp. 52-79参照。
- (9) "Beatus itaque Isaac ex civibus Cordubensium nobilibus, et locupletioribus parentibus natus, dum primaevos adolescentiae annos ingrederetur, atque inter opes bonaque genitorum tenerrime degeret, adeo ut peritus et doctus lingua Arabica exceptoris reipublicae officio fungeretur: ex improvise spiritali flagrans ardore, monachorum vitam optans, Tabanus viculum petiit, qui in partibus aquilonis inter praeupta montium, et condensa silvarum septenis ob urbe milliariibus distans, formosissimis in exercitatione vitae monasticae virorum atque ancillarum Dei rumoribus decoratur. Siquidem in eodem coenobio virum summa timoris Dei reverentia praeditum Hieremiam patruelum habebat: qui etiam inclytus opibus, rebusque abundans, et conjux ejus venerabilis Elisabeth, ac liberi, totaque pene cognatio sumptu proprio fundamenta ipsius coenobii jacentes, divinarum legum perenni adhaesuri obsequio, pridem sese eo contulerant. Ibi per triennium beatus Isaac sub regularibus disciplibus, seu sub reverentissimo abbate Martino praedictae feminae fratre, in sancto propositio militans, extemplo divinitus illustratus, forum adiens, judicem petiit, et ordine quo in praefatione libri disposui, felici obitu sub testimonio Domini nostri Jesu Christi in eadem regia urbe, tertio nonas junias, feria quarta, aera octingentesima octuagesima nona occubuit. Cujus corpus equuleo suspensum, post aliquot dies cum caeteris, qui eum imitando decisi sunt, rapacissimo igni commissum, usque ad ultimam favillam minutum est, ac deinceps amni perdendum immersum est." Eulogius, *Memoriale sanctorum*, I, II, c. 2 (*PL* 115, col. 770B-D).
- (10) Cf. Eulogius, *De vita et passione SS. Virginum Florae et Mariae*. (*PL* 115, cols. 835-842).
- (11) Cf. 注6.
- (12) Alvarus, *Sancti Eulogii Vita vel Passio*. (*PL* 115, cols. 705-724.) また cf. K. B. ウルフ, *op. cit.*,

- pp. 75-91; A. Christys, *op. cit.*, pp. 55-62.
- (13) "Igitur beatus martyr Eulogius nobili stirpe progenitus, Cordubae civitatis patriciae senatorum traduce natus, Ecclesiae ministerio mancipatus, sancti ac beatissimi Zoyli aede deserviens, et in ejusdem collegio clericorum vitam deducens, multis et clarissimis virtutibus floruit, magnis et laudabilibus operibus vixit." *Sancti Eulogii Vita vel Passio*, c. I, 2. (PL 115, cols. 707C).
- (14) 彼のアルヴァルス宛の書簡が一通残されている (PL 121, cols. 462-463)。
- (15) Eulogius, *Memoriale sanctorum*, l. I, 7 (PL 115, col. 745A-B).
- (16) Alvarus, *Sancti Eulogii Vita vel Passio*, c. III, 9. (PL 115, cols. 712B-713A.)
- (17) *Ibid.*, c. V, 15. (PL 115, cols. 716A-717C.)
- (18) 本書については、cf. K. B. ウルフ, *op. cit.*, pp. 111-153.
- (19) "Cum essem olim in Pampilonensi oppido positus, et apud Legerense coenobium demorarer, cunctaque volumina, quae ibi erant, gratia dignoscendi, incomperta revolverem; subito in quadam parte cujusdam opusculi hanc de nefando vate historiam absque auctoris nomine reperi." *Liber apologeticus martyrum*, 16. (PL 115, col. 859B.)
- (20) "Exortus est namque Mahomat haeresiarches tempore Heraclii imperatoris, anno imperii ejus septimo, currente aera DCLVI. In hoc tempore Isidorus Hispalensis episcopus in catholico dogmate claruit, et Sisebutus Toletio regale culmen obtinuit. Ecclesia beati Euphrasii apud Iliturgi urbem super tumulum ejus aedificatur. Toletio quoque beatae Leocadiae aula miro opere, jubente praedicto principe, culmine alto extenditur. Obtinuitque praedictus Mahomat nefandus propheta principatum annis decem, quibus expletis, mortuus est, et sepultus in inferno." PL 115, col. 859B-C.
- (21) 「シセプトは文化・芸術に造詣が深く、文芸活動を支援した。セビーリヤ生まれのイシドーロ（イシドルス）大司教も彼の治世下で活躍し、ギリシャ・ローマの英知を集めて多数の書物を出版した。このシセプトの治世下で西ゴート王国の国民文化が育ったといわれる」（鈴木康久, *op. cit.*, p. 69.）
- (22) Cf. Marie-Thérèse d'Alverny, 'La connaissance de l'Islam en occident du IX^e au milieu du XII^e siècle.' pp. 587-588. (in *La connaissance de l'Islam dans l'Occident médiéval*, Variorum1994.)
- (23) もちろん、D. Millet-Gérard, *Chrétiens mozarabes et culture islamique dans l'Esgane des VIII^e-IX^e siècles*, Paris, 1984, p. 131が指摘するように、『741年のビザンツ・アラブ年代記』も考慮する必要がある。しかし、『小伝』のこの箇所に関するジェラルルの解釈には疑問がある。
- (24) *Conquerors and Chroniclers of Early Medieval Spain*, pp. 113-114の英訳に拠る。
- (25) R. W. Southern, *Western Views of Islam in the Middle Ages*, Harvard University Press, 1978, pp. 24-25.
- (26) "Exordia vero ejus fuerunt talia. Cum esset pusillus, factus est cujusdam viduae subditus. Cumque in negotiis cupidus fenerator discurreret, coepit Christianorum conventiculis assidue interesse, et ut erat astutior tenebrae filius, coepit nonnullas collationes Christianorum memoriae commendare, et inter suos brutos Arabes cunctis sapientior esse. Libidinis vero suae succensus fomite, cum patrona sua jure barbarico in ira congressus est." PL 115, col. 859C.
- (27) 本稿におけるコーランの引用は、すべて、『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1990年に拠る。
- (28) 邦訳として『マホメット伝』嶋田襄平訳（世界文学体系68『アラビア・ペルシア集』1964年、pp. 5-49）がある。
- (29) 同上、pp. 10-16.
- (30) Cf. N. Daniel, *Islam and the West: The Making of an Image*, Oxford, 1993, pp. 109-112.

- (31) “Moxque erroris spiritus in speciem vulturis ei apparens, os aureum sibi ostendens, angelum Gabrielem esse se dixit, et ut propheta appareret, impetravit.” *PL* 115, col. 859C-D.
- (32) “Cumque repletus esset tumore superbiae, coepit inaudita brutis animalibus praedicare, et quasi ratione quadam, ut ab idolorum cultu recederent, et Deum incorporeum in coelis adorarent, insinuavit. Arma sibi credentibus assumere jubet, et quasi novo fidei zelo, ut adversarios gladio trucidarent instituit.” *Id.*, col. 859D.
- (33) “Occulto quoque Deus iudicio (qui olim per prophetam dixerat: Ecce ergo suscitabo super vos Caldaeos, gentem amaram, et velocem, ambulantem super latitudinem terrae, ut possideat tabernacula non sua. Cujus equi velociores lupis vespertinis, et facies eorum ut ventus vrens, ad arguendos fideles, et terram in solitudinem redigendam.) nocere eos permisit. Primum namque fratres imperatoris, qui illius terrae ditionem tenebat, interimunt, et ovariantes, de triumpho victoriae gloriosi effecti, apud Damascus Syriae urbem regni principium fondaverunt.” *Id.*, 859D-860A.
- (34) この点については, cf. *Conquerors and Chroniclers of Early Medieval Spain*. p. 114, n. 13.
- (35) “Psalmos denique idem pseudopropheta in ore insensibilium animalium composuit, vitulae scilicet rubrae memoriam faciens. Araneae quoque muscipulae ad capiendas muscas historiam texuit. Upuppae praeterea et ranae cantus quosdam composuit, ut foetor unius ex ejus ore eructaret, garrulitas vero alterius in ejus labiis non desineret. Alios quoque ad condimentum sui erroris in honorem Joseph, Zachariae, sive etiam genitricis Domini Mariae, stylo suo digessit.” *PL* 115, col. 860A.
- (36) Cf. D. Millet-Gérard, *op. cit.*, pp. 104-108, 129.
- (37) “Cumque in tanto vaticinii sui errore duraret, uxorem vicini sui nomine Zeid concupivit, et suae libidini subjugavit. Quod scelus maritus ejus sentiens, exhorruit, eamque prophetae suo, cui contradicere non valebat, permisit. Ille vero quasi ex voce Dominica in lege sua illud annotavit, dicens: Cumque mulier illa displicuisset in oculis Zeid, et eam repudiasset, sociavimus eam prophetae nostro in conjugium, quod caeteris in exemplum, et posteris fidelibus id agere cupientibus, non sit in peccatum.” *PL* 115, col. 860B.
- (38) W. M. ワット 『ムハンマド』 牧野信也・久保儀明訳, みすず書房, 1970年, pp. 184-185.
- (39) W. M. ワット, *op. cit.*, pp. 184-187.
- (40) Cf. 『日亜対訳 聖クルアーン』 p. 33の注21-23.
- (41) Cf. N. Daniel, *op. cit.*, pp. 119-120.
- (42) “Post cujus tanti sceleris factum mors animae et corporis illius simul aproinquavit. At ille interitum sibimet imminere persentiens, quia propria virtute se resurrecturum nullo modo sciebat, per angelum Gabrielem, qui ei in specie vulturis apparere, ut ipse aiebat, solitus erat, resuscitaturum se tertia die praedixit. Cumque animum inferis tradidisset, solliciti de miraculo quod eis pollicitus fuerat, ardua vigilia cadaver ejus custodire jusserunt. Quem cum tertia die foetentem vidissent, et resurgentem nullo modo cernerent, angelos ideo non adesce dixerunt, quia praesentia suorum terrerentur. Invento igitur salubri (ut putabant) consilio, privatum custodia cadaver ejus reliquerunt, statimque vice angelica ad ejus foetorem canes ingressi latus ejus devoraverunt. Quod reperientes factum, residuum cadaveris ejus humo dederunt. Et ob ejus vindicandam injuriam, annis singulis canes occidere decreverunt: ut merito cum eo habeant illic participium, qui pro eo dignum meruerunt subire martyrium. Digne ei quidem accidit ut canum ventrem tantus ac talis propheta repleret, qui non solum suam, sed multorum animas inferis tradidisset.” *PL* 115, col. 860C-D.

(43) Cf. N. Daniel, *op. cit.*, pp. 125-129.

(44) “Adnotatio Mammetis Arabum principis. Ortus est Mammet haereticus, Arabum pseudo-prophetarum sigillus, Antichristi praecessor, tempore imperatoris Eraclii anno septimo, currente aera sexcentesima quinquagesima vi. In hoc tempore Isidorus Hispalensis in nostro dogmate claruit, et Sisebutus Toletus regulae culmen obtinuit. Quem praedictum nefandum prophetam tantis miraculis eum sequaces sui coruscasse narrantur, ut etiam ardore suae libidinis uxorem alterius auferens, in conjugio sibimet copularit: et ut nullum prophetam fecisse legimus, in camelum, cujus intellectum gerebat, praesideret. Morte vero interveniente cum se die tertia resurrecturum polliceretur, custodientium negligentia a canibus repertus est devoratus. Obtinuit principatum annis decem quibus expletis sepultus est in infernum, aera D. C. C. XVII. (Venerunt Mauri in Hispania tempore Roderici regis, anno Arabum nonagesimo primo, aera millesima centesima XIII, anno Arabum CCCCLXVIII.” *PL* 121, col. 460.

(45) Cf. D. Millet-Gérard, *op. cit.*, p. 125, n. 209.

(46) Cf. *Ibid.*, p. 132. この部分は本文がこわれている可能性が高い。A. Christys, *op. cit.*, p. 64も参照のこと。

(47) “Multa quidem et alia scelera operatus est, quae non sunt scripta in libro hoc. Hoc tantum scriptum est, ut legentes quantus hic fuerit agnoscant.” *PL* 115, col. 860D.

(48) Cf. A. Christys, *op. cit.*, pp. 62-63.

(49) Cf. K. B. ウルフ, *op. cit.*, p. 58.

(50) その概略は、N. Daniel, *op. cit.*, pp. 100-130.